

## 日常

関西創価高等学校 3年

入江 美奈子

高校生として迎える最後の夏休み、私はあることに必死に取り組んでいました。海外大学志望の私は提出する必要がある推薦書のもととなる自己推薦書を書いていたのです。自分のいいところを高校時代のエピソードを交え、六つ出して先生に書いていただくことになっており、これは私にとって、自分を見つめ直すとても素敵な機会になりました。元来私は、とても楽観的で類を見ないポジティブ思考の持ち主です。だからといってすべてを放っておいてしまうわけでもないし、根が真面目なものいいところだと自負しています。そんな私のいいところはさておいて、言ってしまうえば、これが初めて私の楽観主義が仇となったことでありました。私は生まれてこのかた失敗を失敗だと認識したことがありません。なぜなら全て次の成功のチャンスで、挑戦した証ですらあると考えるからです。そんな思考の持ち主であるため、感情の起伏が大きくなく、自分の成長エピソードのきっかけとして失敗を盛り込むことが非常に困難でした。そのため一つまた一つと減っていく形容詞に悩まされていました。そんな時担当の先生がある長所を教えてくださいました。偏見が無いことです。そうして私は偏見が無いことの原因を探し始めました。何より先に出てきたのが弟の存在でした。私には二歳差のダウン症の弟がいます。元来愛嬌があってみんなの懐に入るのが上手な彼はみんなにとっても愛されて育ちました。私は弟に連れ添って同じ障がいのある子たちの集まりに参加したりしました。そうするとある日、私の感性を大きく揺さぶるあることに気付いたのです。そうした集会で弟と友だちが一緒になって遊んでいる姿を見るとそこにはいつも弾けるような笑顔があることに気付いたのです。その時私は幼いながらも、人間は本来こうした輝ける笑顔をもった存在なのではないかと思ったことを鮮明に覚えています。障がいのある弟は健常者よりわからないことや出来ないことがどうしても多くなってしまい、時には助けが必要です。ですが、そんな弟だったからこそ、人間のまっさらな姿を投影してくれた気がしたのです。その気付き以来、私は人が好きになっていきました。その気付きがなければ今の私はいないと言っても過言ではありません。どんな人間もきっとその根っこには輝ける何かがあって、でも、自分で選択を間違えたり、時には他人に曲げられたりしながら少しずつ陰りを落としてしまう。その

陰りのきっかけは大半が言葉です。自分の見栄のために人を蔑む言葉、あなたには出来ないとなじる言葉、世の中はどうしたってそんな言葉に溢れていて、避けて通ることは難しいと言えます。そして、少なくない人数の人たちが本来のまっさらな姿とかけ離れたところにまで追いやられてしまうのです。そうした人を作ってしまう事にならないために、私にはひとつ秘策があります。それは「ダメ」と言わないことです。私が思うに、日常で生きていてする行動の中で取り返しがつかなくなるほど「ダメ」なことはあまり起こりえません。時間さえあれば大抵どうにかなるのです。そして、注意する言葉は決して「ダメ」を使う必要はありません。私はこれまで「ダメ無し」を信条に弟と一生懸命向き合ってきました。そんな私達の日常を少し紹介します。八月一〇日から一二日にかけて母が単身で帰省し、父・私・弟と妹の四人で家事を担うことになりました。そのうち二日は父が仕事だったため、ほとんどの時間を私達三兄弟で過ごしました。私達の連帯が光ったのは三日目のお昼でした。料理が得意な私は炊事を担当し、教育上手の妹は皿洗いをしながら弟に皿洗いを教え、味噌汁も作ってくれました。弟に何かを教えることは正直なかなか根気が必要で、妹の教育力にはいつも驚かされます。一生懸命三人で台所に立ってご飯が完成していく中、ふと洗い上がりを見ると、泡の残った食器たちがいました。「泡は洗い流さないとダメだよ」という言葉の可能性があるので、私は常々そうしてきたように実演しながら「泡はこうやって流すんだよ、皿洗いしてくれてありがとうね。」と伝えました。すると弟はにっこり笑って「うん!」と元気のいい返事をくれました。感謝を添えることもまた私の信条です。協力して完成したご飯たちはどれもとっても美味しく、些細な幸せに感謝しました。この三日間を過ごして、それぞれの得手不得手を生かして埋め合っただけで乗り切った私達はとても清々しい気持ちで母を迎えました。この家族の一員でまっさらのまま育ち、些細な幸せに気付ける日常にとっても感謝しています。